【新刊紹介】

波多野宏之『画像ドキュメンテーションの世界』

北川　恵美子

美術史を研究するにあたって、①文献（単行図書・定期刊行物等の図書資料）、②画像（写真・スライド等の非図書資料）という両面からの資料収集はたいへん重要である。

情報化時代といわれる今日においてなお、とりわけ、画像資料に関して、画像そのものの収集はもちろんだが、情報収集さえも難しいことがある。どこへ行き、どのようにしたら、どれだけの情報を得ることができるのか、といったことから、図像研究にあたって、芸術家名・作品名別だけではなく、主題別で図像を探そうとする場合まで、様々な段階の難しさを伴う。この書物は「はじめに」のところで述べられているように、美術館・図書館に携わる人々や情報一般にかかわる多くの人々を幅広く対象として著わされている。が、そういった人々はもちろん、美術史研究や図書館情報学を志す人たちにとっても、この書物は、様々な数多くの問いかけに希望の光を投げかけてくれる。

内容は五つの章から構成されている。すなわち、「Ⅰ画像資料の諸相」、「Ⅱスライドライブラリーの世界」、「Ⅲ画像情報の整理と応用」、「Ⅳ画像ドキュメンテーションの課題と展望」、「Ⅴ文献案内」という章立てになっている。そして、Ⅰ―Ⅲは各六節から成り、Ⅳ章は四節、Ⅴ章は三節から成る。

まず、「Ⅰ画像資料の諸相」において、画像資料の現状と多様性が語られ、画像資料が図書館において占める位置、そして、メディアテックの定義とその活動が代表例を挙げながら概観されている。とりわけ、三節で従来の伝統的なメディアを主体とする図書館の代表例としてフォルネイ図書館を挙げて、その成立、資料の特色や、整理状況、利用の便宜が詳述され、その評価から発展してイコノテックの意義が考察されている。さらに、ドイツとフランスを主な具体例としてアルトテックの現状を見ながら日本の現状にも目をむけ、アルトテックの意義が深く探究されている。それから、映像ライブラリーやハイビジョンの多様性と応用の可能性が述べられている。

次に、「Ⅱスライドライブラリーの世界」において、美術作品の写真の重要性とその位置づけ、そして、欧米の代表的な美術写真所蔵機関（美術館・美術史研究所・図書館等）でのスライドコレクションの特徴や基準が綿密な調査と豊富なデータによって詳述されている。さらに、フォトライブラリーや写真検索の実際に関しても、一覧表や多くの写真でわかりやすく紹介されている。なかでも、四節で Visual Resources Curator という職能とその地位についてふれられている点は注目に値する。

それから、「Ⅲ画像情報の整理と応用」では、画像のメディア変換や画像データベースの実情とその問題点が提起されている。そして、パソコンと市販ソフトによる画像情報の入力や検索といった実用的な操作が、実際のパソコン画面の写真図と共に順を追って解説されている。それから、画像の資料と情報の単位や記述のしかたについて多くの問題点を様々な角度から検討し発展させて、目録規則・分類・件名・アクセスポイントといった図書館情報学の画像データベースへの広範囲の応用、様々な観点からのアクセスの重要性が論じられている。特に、美術作品を具体例に挙げて、画像の分類や主題アクセスの難しさが論述されている。さらに、最先端の画像通信に関する情報も盛り込まれている。

「Ⅳ画像ドキュメンテーションの課題と展望」では、Ⅰ—Ⅲ章をふまえて、1写真・ビデオ・映画、2美術作品、3ニューメディア、といった大別して三つの観点から、複雑な著作権の問題がとりあげられている。そして、

画像ドキュメンテーションの現場とそれに関連する職能団体が簡潔に紹介されている。さらには、画像ドキュメンテーションの発展を図るための〈教育〉の必要性をはじめ、多くの課題と展望が挙げられている。

最後に、「V 文献案内」では、1マルチメディア、2イコノグラフィー、という二つの観点から、それぞれのタイプと特徴別に厳選された和書が解題と共に多数紹介されている。とりわけ、イコノグラフィーに関する書物は、美術史研究にあたって必読というべきものばかりである。

このように、この書物は、著者の長年の経験と緻密な調査研究に基づき、数多くの具体例を挙げ、実際の現況をふまえながら、これまでほとんど未知の分野であった、まさしく書名どおりの『画像ドキュメンテーションの世界』というものが体系的にとらえられ、明快に多角的に論じられている。豊富な写真や挿図を交えて、とてもわかりやすく紹介されている、最新かつ最先端の画像情報には目を見はるものがある。そして、著者が言及しているように、画像ドキュメンテーションにはかなり多くの諸課題がある。なかでも、折りにふれて、欧米の代表例と日本の現状とが比較されているが、日本においては検討すべき重要な課題が山積みであるということを実感させられる。この書物が良い契機となって様々な展望が実現され、やがて画像ドキュメンテーションがいっそう進展していくことを、おおいに期待したい。

（勁草書房、一九九三年十一月、一八九頁）